

8月の行事・歳時記といえば

外販課 西口 晃平

8月といえば、「お盆」を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。暑い夏真っ盛りの8月ですが、暦の上では秋へと向かっていきます。2016年に制定された、まだ歴史の浅い「山の日」などを含め、8月の行事についてご紹介します。

8月7日【立秋】

2026年の立秋は、8月7日から8月22日です。「立秋」は二十四節気のひとつで日付が固定されているわけではありません。また、立秋といっても、立秋に入る日と、立秋（二十四節気の第13）～処暑（二十四節気の第14）までの約15日間をさす場合があります。

暦の上では立秋から秋に入るため、「今日は立秋。暦の上では秋となりました」「立秋を迎え秋となりましたが」などのフレーズがよく使われます。しかし、まだかなり暑い日が続くため、立秋以降の暑さを「残暑」といいます。また、「暑中見舞い」は立秋以降「残暑見舞い」に変わります。立秋を迎えると、いつまでもこの暑さが続くわけではなく、秋に向かっていくんだという感じになります。

8月11日【山の日】

山の日 は8月11日です。2020年と2021年は東京五輪の開閉会式に合わせて3つの祝日（海の日、山の日、スポーツの日）が移動されましたが、2022年から元に戻りました。

山の日とは「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」という趣旨の国民の祝日。他の祝日と異なり、山に関する特別な出来事などの明確な由来があるわけではなく、「山の日」を国民の祝日にしようという様々な動きによってできました。

日本は国土のおよそ6～7割が山地で、周りを海に囲まれているため、山や海に畏敬の念を抱きながら生活し、それらの恵みに感謝しながら自然とともに生きてきました。1995年に「海の日」が国民の祝日になると、山梨県をはじめ複数の府県で独自の山の日ができ、次第に「山の日」を国民の祝日にする運動が全国に広がりました。こうした動きを受けて2014年に「山の日」が制定され、2016年に施行となりました。



8月13～16日【お盆】

お盆は、先祖の霊を家に迎えて供養しながら、「お陰さまで元気で暮らしています」と感謝する行事です。

旧暦のころは7月15日に先祖の霊が帰ってくるとされていました。今でも7月にお盆を行う地域がありますが、新暦では8月半ばにあたるため、昔の季節感そのままにできるよう、多くの地域で月遅れの8月15日を中心に行っています。8月にお盆休みがあり、お盆の帰省ラッシュになるのは、みんながお盆に里帰りをするからです。

●8月13日＝迎え盆・8月15日＝盆中日・8月16日＝送り盆

お盆の風習は宗派や地域によってさまざまですが、盆棚をしつらえて供物を供え、盆提灯を飾ったり、迎え火や送り火などを行うところが多いです。京都の「五山の送り火」や長崎の「精霊（しょうろう）流し」も送り火のひとつです。

盆踊りや関西地方の「地蔵盆」のように、お盆にまつわる行事もたくさんあります。盆踊りは、お盆にかえってきた祖霊を慰める霊鎮め（たましずめ）の行事。念仏踊り（自分で念仏を唱えながら踊る）から踊り念仏（念仏を唱える人と踊る人がいます）に発展した民族芸能が、盂蘭盆会と結びつき、精霊を慰めたり送り出すための行事になりました。本来15日の晩に盆踊りをし、16日に精霊送りをするものもそのためです。

8月の行事食・食べ物

●暑気払い:冷麦、そうめん、ビール、瓜、氷、甘酒など

暑さをうちかう「暑気払い」は、夏の暑い時期ならいつでも構いません。体に溜まった熱気を取り除き、夏を乗り越えるための「暑気払い」には、夏バテを防ぐ上でも効果的な冷麦やそうめん、体を冷やし利尿作用のあるビール、古くから暑気払いに効く食べ物として重宝されていた瓜（西瓜・胡瓜・冬瓜・苦瓜・南瓜）、夏ならではの風物詩でもある氷（かき氷・氷菓子・氷料理）、夏の季語でもある甘酒などが昔ながらの定番です。



あなたは雨女？晴れ男？

総務課 稲本 たか子

私たちの日常会話には、「晴れ男」や「雨女」といった言葉が登場します。これらは「その人が外出する日は必ず晴れる」あるいは「その人が出かけると雨が降る」といった特徴を持つ人を表す言葉です。一種の俗説や迷信に近いものですが、意外と広く知られており、イベントや旅行計画の際に話題になる事も少なくありません。

しかし、この「晴れ男」や「雨女」という現象は本当に存在するのでしょうか？ それとも単なる偶然の産物なののでしょうか？ この現象について掘り下げて考えてみます。

晴れ男・雨女の定義と由来

「晴れ男」「雨女」の言葉の起源について考えてみましょう。これらの表現には、天候と個人の運命や性質を結び付けたものです。古くから天候は人々の生活に密接に関わっており、特に農耕社会においては天気が作物の収穫を左右する重要な要素でした。そのため、人間は、天気を神秘的な力や運命と結び付けて考える傾向にありました。また、日本語には「雨男」や「晴れ女」といった言葉も存在しますが、これは性別にかかわらず使われることもあります。特定の人物がいると「天気が悪くなる」または「晴れる」と信じられるのは、人間が偶然の出来事を見出そうとする心理的な性質とも関係しています。

心理的要因と文化的背景

晴れ男や雨女という現象には、心理的な要因だけでなく文化的な背景も影響しています。特に日本では、天気が人々の行動や運命に強く結びつけられることが多いです。

日本文化における天気と運命の関連性

日本には古来より天気にまつわる多くの伝承や迷信があります。例えば、てるてる坊主を作って雨を防ごうとする習慣や「夕焼けがきれいだと翌日は晴れる」といったことわざがその例です。こうした文化背景が晴れ男や雨女といった考え方を広める要因となっている可能性があります。

集団の中での「キャラクターづけ」

さらに、晴れ男や雨女と呼ばれること自体がその人の「キャラクター」として定着する場合もあります。イベントや旅行の際に「この人がいるから晴れるだろう」と言われたり、「また雨が降ったね、やっぱり雨女だ」と冗談交じりに指摘されたりすることで、本人もそれを意識し始めることがあります。このようなキャラクターづけは、集団の中で役割分担や親密さを高める要因となることがあります。場合によっては本人にプレッシャーを与える事もあります。

晴れ男や雨女という言葉は迷信に近いものですが、科学的に正確でないからといって完全に否定するのも少し味気ないかもしれません。これらの言葉は、時に場を盛り上げる役割を果たし、人々の会話や交流を円錐にする効果もあります。また、天気と個人の性質を結び付ける考え方は、ある意味で自然との一体感を感じさせるものでもあります。

結論

「晴れ男」や「雨女」という言葉には科学的根拠はありませんが、人々の心理や文化に深く根ざした現象であることが分かります。偶然が重なったりでこうした考え方が広まってきました。また、これらの言葉は場を和ませたり、人々のつながりを深めたりする役割を果たすこともあります。

最終的には「晴れ男」や「雨女」といった現象をあまり深刻に考えず、自然との関係を楽しむ一つのエピソードとして捉えるのが良いのではないのでしょうか？ 日々の天気はコントロール出来なくても私たちの心の持ちよう次第でどんな天気も素敵な思い出に変えることができるはずです。

ちなみに私の娘は大切な行事がある時は雨の日が多いです。「雨女」です。